

巻頭言

総合文化研究所長 松浦寿夫

二〇一二年度は東京外国語大学が新たに二学部制を採用したという点で、ひとつの転換点となる一年でした。この教育体制の大きな変化がもたらしうる効果の具体的な見積もりにはまだ多くの時間が必要なのはいうまでもありません。総合文化研究所は研究組織であって、教育に直接的に関与するわけではありませんが、この二学部制の成立以後の人事において、本研究所の主要構成員となる総合文化コース所属の教員の減少という憂慮すべき事態の徴候はすでに現れ始めています。また、本年度は本研究所の予算の大幅な削減にも直面せざるをえませんでした。

今年度から二年間にわたって本研究所の所長を務めることになりました筆者にとって、まず最大の課題はきわめて限られた予算の枠組みのなかで、可能な限り多様な企画を実現し、研究所構成教員ばかりでなく、学生ならびに学外の研究者の方々の参加を求めることでした。幸いなことに、薄謝にもかかわらず友人であることに甘えて、第一線でご活躍中の学外の研究者、芸術家の方々を発表者としてお招きすることができました。一連のシンポジウム、ワークショップが研究の観点からして有意義なものでありえたのも、学外の方々のご好意によるものであり、この場で改めて厚くお礼申し上げる次第です。

どの大学、研究機関においても、程度の差はあるとはいえ、様々な業務の増大とともに各研究者の研究環境の維持は困難な局面を迎えつつありますが、このような傾向への抵抗線の構築たりえるように、ごく簡単にいえば、学内行政の話題ではなく、研究にかかわる主題を相互的に語り合える場として、本研究所の活動をさらに充実したものにする努力を今後とも続行していきたいと考えています。今年度は五つのシンポジウムを実現しましたが、企画したものの実現できなかったシンポジウム、「庭園の詩学」、「写真とは何か」、「栗田勇を読む」、「建築と都市」、「アドルノ／ヴァレリー」（いずれも仮題）を早い時期に実現したいと考えています。また、他にも可能なご提案を皆様からお寄せいただくよう、そして変わることのないご協力をお願い申し上げます。